

# 小学校教員が就学までに身につけてほしいと考える 生活習慣と生活スキル

山下 晋\* 野田美樹\* 丸山笑里佳\* 鳥居恵治\*

## 要旨

本研究は、小学校教員が就学時点で身につけてほしいと考えている生活習慣や生活スキルを明らかにし、できる限り小1プロブレムを引き起こさないための保育のあり方を検討した。その結果、小学校教員は就学までに生活習慣や生活スキルを身につけてほしいと考えていたのに対し、幼稚園や保育所などでは、自分から生活や遊びに必要なスキルを獲得しようとする意欲や心の成長を大切に考えていた。このように生活習慣や生活スキルに対する考え方の違いが「小1プロブレム」の要因と考えられることから、幼稚園や保育所などと小学校は互いの役割について相互理解をしていく必要があることが示された。

## Abstract

The authors defined styles and skills of life that elementary school teachers wish preschoolers to acquire, examined what childcare should be to minimize the problem with first graders, and found that kindergartens and day-care centers wished them to become willing or spiritually grown to acquire skills needed for living and playing. Because such difference in attitude may cause the problems with first graders, mutual roles should be understood more between elementary schools and kindergartens / day-care centers.

キーワード：小学校就学前、小1プロブレム、生活習慣、生活スキル

## I. 緒言

近年、就学した時点で、子どもが授業中に騒いだり、勝手に動き回ったりして、授業が成り立たないなどの「小1プロブレム」が問題となっている。この問題は幼稚園や保育所などと小学校との間に横たわる教育のしくみと文化の違い、接続のずれを表す象徴的存在となっている<sup>1)</sup>。

この背景の1つには、少子化や核家族化など生活スタイルの変化、保護者の養育態度の変化に伴って、子どもの基本的な生活習慣の自立ができなくなってきたことがあげられる。また、長谷部<sup>2)</sup>は現代のメディアの影響や遊びの変化、栄養摂取の偏りなど食生活の問題や変化も要因の一端ととらえている。

「基本的な生活習慣」の自立とは、毎日の生活をする中で習慣化された行為として、日常的に繰り返される生活の基本行動である。それらを身につけるために、家庭に加え、幼稚園や保育所などでは、日々

指導が行われている。身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でしようとする意識を育み、生活習慣や生活スキルを身につけることができるように、年齢や個人差に即して様々な指導が行われている(図1)。このように、家庭や幼稚園や保育所などにおいて、基本的な生活習慣や生活スキル獲得のために取り組んでいるが、実際に就学までにそれらのことが身についているのか、また、その水準に対する小学校教員の感じ方など、疑問な点が多い。

また、保育者の養成校で学ぶ学生が保育職に就いたとき、小学校での生活を考慮し、先を見通した保育をすることは小1プロブレムを解消する点からも重要である。そのために、岡崎女子短期大学(以下:本学)で学生が履修する保育内容演習「健康」における「幼児期の生活習慣」の単元で、小学校教員が子どもの生活習慣や生活スキルについてどのような考えを持っているかを学ぶことは非常に意

\* 岡崎女子短期大学



図1：幼稚園児を対象とした指導の様子

幼稚園や保育所などでは、自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする、健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付けるために、日々、指導が行われている。左から絵本を用いた虫歯予防の指導、ペーパーを使った栄養指導、鉄棒の指導の様子を示している。いずれも、本学の学生が「子どもの研究Ⅱ」の授業内に、附属幼稚園と協力して行ったものである。

義深い。

そこで本研究は、小学校教員が就学時点で身につけてほしいと考えている生活習慣や生活スキルを明らかにし、できる限り小1プロブレムを引き起こさないための保育のあり方を検討することを目的とした。

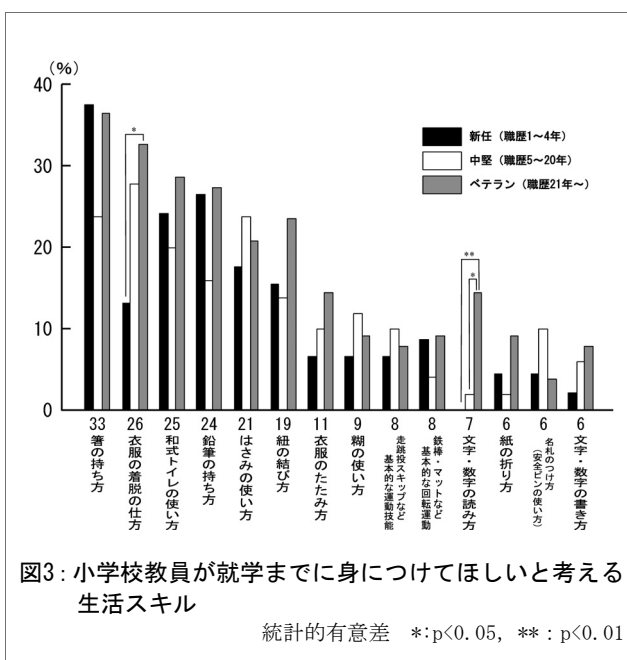
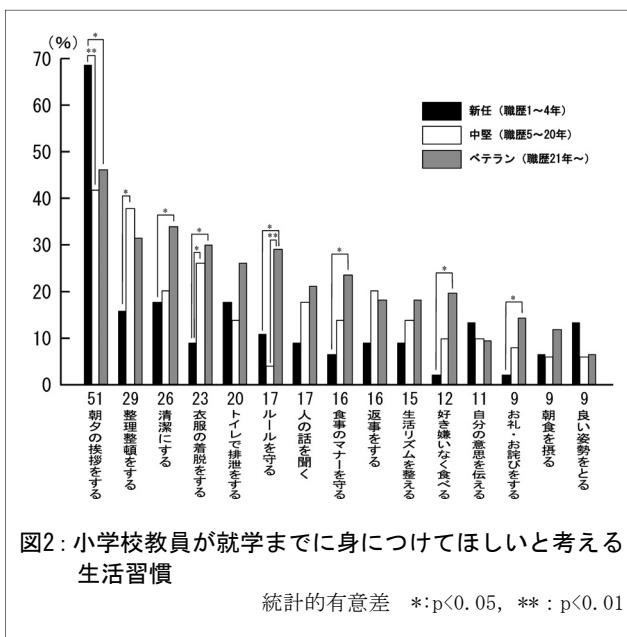
## Ⅱ. 方法

愛知県内12校（尾張地区1校、西三河地区7校、東三河地区2校、知多地区2校、いずれも公立校）の小学校教員を対象に、「(問1) 就学までに身につけてほしいと考える生活習慣は何か」、「(問2) 就学までに身につけてほしいと考える生活スキルは何か」について、自由記述形式のアンケート調査を行った。

アンケートに回答した171名を職歴に基づき、職歴1～4年を新任群（平均2.4±1.1年、男性20名、女性25名、計45名）、職歴5～20年を中堅群（平均11.4±5.4年、男性15名、女性35名、計50名）、職歴21年以上をベテラン群（平均30.0±4.9年、男性23名、女性53名、計76名）の3群に分類した。

得られた回答を生活習慣と生活スキルのカテゴリに分類した後、さらに項目ごとに再分類した。分類された項目における各群間の比較にはpearsonの $\chi^2$ 検定を行った。なお、分析にはSPSS ver. 18を用い、本研究における統計上の有意水準は5%とした。

また、得られた結果について、幼稚園教諭及び小学校教員に対し、その原因や背景を明らかにするためにインタビュー調査を行い、考察の参考とした。



### Ⅲ. 結果及び考察

小学校教員が就学までに身につけてほしいと考える生活習慣、同様に生活スキルについて、新任、中堅、ベテランの各群の回答率(%)を示した(図2、図3)。項目の上の数字は、全体の回答率を表している。

生活習慣に関して、全体で最も回答率が高かったものは「朝夕の挨拶をする(51%)」、次いで、「整理整頓をする(29%)」、「清潔にする(26%)」、「衣服の着脱をする(23%)」、「トイレで排泄をする(20%)」の順であった。また、各群間で比較すると、「朝夕の挨拶をする」では新任一中堅群、新任一ベテラン群、「整理整頓をする」では新任一中堅群、「清潔にする」では新任一ベテラン群、「衣服の着脱をする」では新任一中堅群、新任一ベテラン群、「ルールを守る」では新任一ベテラン群、中堅一ベテラン群、「食事のマナーを守る」では新任一ベテラン群、「好き嫌いなく食べる」では新任一ベテラン群、「お礼・お詫びをする」では新任一ベテラン群間に有意な差が見られた。

生活スキルに関して、全体の回答率で最も高かったものは「箸の持ち方(33%)」、「衣服の着脱の仕方(26%)」、「和式トイレの使い方(25%)」、「鉛筆の持ち方(24%)」、「はさみの使い方(21%)」の順であった。また、各群間で比較すると、「衣服の着脱の仕方」では新任一ベテラン群、「文字・数字の読み方」では新任一ベテラン群、中堅一ベテラン群の間に有意な差が見られた。

#### 1. 小学校からの視点

生活習慣の中で、「朝夕の挨拶」が全体の回答率で最も高かった原因として、小学校教員は挨拶を人間関係の基礎であり、重要視していることが考えられる。また、新任群が、中堅群やベテラン群に比べ「朝夕の挨拶をする」ことを就学までに身につけてほしいと考える生活習慣としていた。このことについて、ベテランの教員は、挨拶は大人(教員)からするもので、それに対する子どもの声の大小などから、その子どもの元気さを読み取るというように、挨拶を人間関係の基礎という意識より、子どもの様子や体調を測る1つの手段と捉えていると考えられる。一方で、新任の教員は、挨拶が人間関係の基礎であるという意識のみが強く、それ自体が機械的な受け答えになってしまっており、その結果、「挨拶

で大きな声が出ていない」ということが、「挨拶がきちんとできない」、さらに、「挨拶の習慣を身につけて欲しい」というように捉えているため、子どもと接する経験(職歴)がこのような違いを生じさせる原因であろうと考えられた。

生活習慣や生活スキルについて、挨拶以外にも多くの項目が挙げられた。これらは、小学校という集団生活において、子ども一人ひとりへの対応には限界があることから、欠かすことができない基本的なものである。例えば、机やロッカーの中の整理整頓ができていないと、保護者への連絡が届かないかもしれない。また、「話を聞いて」、「教科書を開いて」、「着替えて」など、一斉に指示を出したときに、理解して行動できなかつたり、はさみやのりを使用するという生活スキルが未熟であったりすることで、クラス全体の流れについていくことが難しく、結果として授業の遅れが生じるかもしれない。さらに、みんなで使うトイレをきれいに使用することができなければ、次の子どもが使えなくなってしまうかもしれない。このようなことが起こらないためにも、小学校教員は就学前に多くの生活習慣や生活スキルを身につけてほしいと考えるのだろう。

ベテラン群は新任群と比較して、生活習慣では6項目、生活スキルでは2項目において有意に高く就学までに身につけてほしいと考えていることが明らかとなり、ここでも職歴の差が表れていた。この原因は、社会の変化に伴い、様々な子どもの姿があると理解しながらも、「1年生ならこれくらいはできるはず」という経験によって作られた固定観念が強くと推測される。

一方で、板倉<sup>3)</sup>は入学前にぜひとも身につけておきたいのは何かという問いに、ベテラン教師は(1)ひらがなの習得、(2)落ち着いた学習態度をあげており、そのためには自立・社会性・遊び・安全・食事を中心とした生活習慣や学習に重点を置いている。これは、ベテランの教員が、清潔にすること、衣服の着脱をすること、ルールを守ること、食事のマナーを守ること、好き嫌いなく食べること、お礼やお詫びをすることができるということが、小学校で集団生活を送り、学ぶためのレディネスであると経験的に感じているためであると考えられる。一方で、新任の教員は経験が少ないことから、そのように思わないことが推察された。

岸井<sup>4)</sup>は日常繰り返す行動について習慣化が進め

ば、いろいろなことを安定して行うことができるが、もし習慣化ができていないと、その都度改めて一からすることになり、その時の気分によって左右されたり、忘れたり、やり過ぎたりして、大きな力を費やしながら、結果として不安定な、失敗の多い日常生活になるとしており、安定した生活を送るためにも、生活習慣や生活スキルを身につけることは重要なことである。

また、小学校教員に対するインタビューから、小学校において、昔に比べて生活上の問題を抱える児童が多くなったと感じていた。以前は「小1プロブレム」という言葉はなく、子どもたちが幼稚園や保育所などと小学校の間にある段差を克服できていた。これができなくなったのは、核家族化による子育ての孤立化、養育態度の変化、養育力の低下によって、知恵の継承がされていないために、子どもの生活力に格差が生じたことが原因と考えられる。

さらに以前は、地域全体で子どもに声をかけ、助け合い、時には叱るなどみんなで子どもを育てていた。また、遊びの内容も現在と異なり、異年齢の集団で体を動かす遊びが中心であった。その遊びの中で、小さい子には優しくする、ルールを守るなど、規範意識、生活力が身についていた。しかし、現在の電子ゲームを中心とした遊びでは規範意識が身につかず、集団生活上欠かせないルールを守る必要性が、身につけにくくなっているのだろう。新任の教員はどちらかと言えば、電子ゲームなど現在の遊びで育った者が多く、今の子どもたちと感覚が近いために、ベテランの教員ほど生活習慣や生活スキルを身につける必要性を感じないのではないかと考えられた。

## 2. 幼稚園、保育所からの視点

幼稚園や保育所などにおいては、幼稚園教育要領<sup>5)</sup>や保育所保育指針<sup>6)</sup>に基づき、各園(所)の教育課程や保育課程が編成されており、これに従って教育(保育)がなされている。

近年、幼稚園や保育所では、園の特色として、文字の読み書きや音楽、英語などをプログラム化している園も増えてきているが、幼稚園教育要領や保育所保育指針の中で、生活習慣や生活スキルを身につけさせるという視点の記述は見られない。

しかし、各項目に関わる内容は解説書などに示されており、例えば、「清潔」、「衣服の着脱」、「食事」、「排泄」などの生活習慣については、心身の健康に

関する領域『健康』の[内容]“(7)身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排せつなどの生活に必要な活動を自分でする。”に続く文章として“<中略>幼児自身が必要性に気付き、自分でしようとする気持ちが持てるように援助することが大切である。幼児は、教師との温かいつながりの中で、適切な援助を受けることによって、生活に必要な活動を自分でしようとするようになり、自立へとむかう。<中略>”と示されている<sup>7)</sup>。また、人との関わりに関する領域『人間関係』の[内容]“(3)自分でできることは自分でする。”には“幼児が自分の身の回りのことなど、できるだけ自分のちからでやろうとする意欲を育てることは大切なことである。この場合、単に何かを「できる」、「できない」ということのみが問題ではなく、あくまでも自分でやりたいことを意識し、自分が思ったことができたということを楽しむ気持ちが大切である。自分でやってみたいという意欲をもったり、やったらできたという充実感や満足感を味わったりすることが自立の第一歩である。<中略>”と示されている<sup>8)</sup>。つまり、保育者にとって、生活習慣の習得は表面的なものではなく、子どもの心の成長の成果であると捉えられている。

「挨拶」、「整理整頓」、「ルールを守る」なども、就学までに育つことが期待される内容として幼稚園教育要領に示されているが、他の生活習慣と同様に、単にある行動様式を繰り返して行わせることによって習慣化させようとする指導ではなく、必要な体験や適切な援助によって一つ一つの生活習慣や生活スキルの意味を確認し、自分でやってみたいという意欲をもって行うようにすることを大切にしている。幼児期の発達の特徴を十分に踏まえてきめ細やかな対応を図ることが重要であると考えている。

また、幼稚園や保育所などにおいて、小学校教員が就学までに身に付けてほしいと考える生活スキルの指導も日々行われている。例えば、「衣服の着脱の仕方・たたみ方」では、身体測定の日には年長児が年少児の部屋に手伝いに行き、着脱の手助けやたたみ方のお手本を見せる体験をする。子どもは役に立つ喜びや思いやりの心を感じながら、着脱の仕方やたたみ方を身に付けるようとする。「紐の結び方」では、七夕飾りを笹に結び付けたり、誕生日カードにリボン結びの飾りを付けたりする体験をする。子どもは、楽しみな気持ちや夢を膨らませながら、紐の結び方を身に付けようとする。生活習慣の習得と

同じように、子どもは生活や遊びを通して周囲の環境に興味をもって自分から関わることによって様々な活動を展開する中で、充実感や満足感を味わう体験を通して学んでいるのである。

以上の考察から、幼稚園や保育所などにおいては、ある生活習慣や生活スキルが「できる」、「できない」ということや、そのできばえを重視するのではなく、自分から生活や遊びに必要なスキルを獲得しようとする意欲や豊かな想像力を育む心の成長を大切に考えているのに対し、小学校ではある水準に達することが求められ、評価されていた。このように、幼稚園や保育所などと小学校の教員は、子どもの育ちに関して別々の目標を持って熱心に取り組んでいるが、相互理解ができていないことが、「小1プロブレム」につながる1つの要因と考えられた。

幼稚園や保育所などにおける生活習慣と生活スキルの指導のあり方、小学校への接続のあり方について検討し理解を深めることは、保育の内容と密接に関わっており、幼児一人ひとりの理解の仕方や環境構成、日々の保育を省みることにつながるうえ、家庭（保護者）との連携を強化する契機ともなり、保育者に求められる専門性を深めることに繋がると考えられる。

幼稚園や保育所などは子どもたちを小学校へ送り出すだけ、小学校は、就学前の子どもたちの状況を知らないでは、連携を図ることはできない。お互いに自己完結するのではなく、保育者は、幼稚園や保育所などは小学校へ続いていると考え、小学校教員は、小学校は幼稚園や保育所などからの繋がりがあると考えて、継続的にコミュニケーションをとることが重要である。幼稚園や保育所などは、子どもの状況の申し送りをし、小学校は1年生の生活の姿を報告するといった連携の仕方から一歩踏み込み、幼稚園や保育所などは小学校の教員が目標としている生活習慣とスキルの水準を理解し、子どもの育ちの先を見通すことによって保育は変わるだろう。一方、小学校教員は子どもの育ちを探ることによって、「できる」、「できない」を基準にして判断せず、「やろう」とする意欲を認め、生活習慣や生活スキルなどを身につけるための指導を意識して加えることができるであろう。つまり、相互理解ができれば、子どもの育ちをより良いものにすることができることから、「小1プロブレム」を引き起こさないために、我々はそれぞれの役割を大切にしながら、

相互に伝えていくことをしなければならない。

#### IV. まとめ

本研究は、小学校教員が就学時点で身につけてほしいと考えている生活習慣や生活スキルを明らかにし、できる限り小1プロブレムを引き起こさないための保育のあり方を検討することを目的とした。その結果、小学校教員は、小学校という集団生活を送るうえで「朝夕の挨拶をする」、「整理整頓をする」、「清潔にする」などの生活習慣、「箸の持ち方」、「衣服の着脱の仕方」、「和式トイレの使い方」などの生活スキルが身につけてほしいと考えていた。また、これらについては、子どもと接する経験（職歴）によって考え方が異なっていた。一方、幼稚園や保育所などでは、ある生活習慣や生活スキルが「できる」、「できない」ということや、そのできばえが重視されるのではなく、自分から生活や遊びに必要なスキルを獲得しようとする意欲や豊かな想像力を育む心の成長を大切に考えているというように、幼稚園や保育所などと小学校では、子どもたちの生活習慣や生活スキルに対して、別々の目標を持っていた。「小1プロブレム」を引き起こさないためには、幼稚園や保育所と小学校は、それぞれの役割を大切にしながら、相互理解をしていく必要があることが明らかとなった。

#### 謝辞

本研究の実施に当たり、愛知県内12校の小学校長はじめアンケート調査にご協力いただきました先生方、ご助言をくださいました本学付属幼稚園園長藤井哲也先生、豊橋市立つつじが丘小学校校長竹内輝先生に深く感謝いたします。

#### 引用・参考文献

- 1) 東京学芸大学附属竹早小学校・幼稚園著、小1プロブレム？学校プロブレム？できることからはじめよう！、東洋完出版社(2007)
- 2) 長谷部比呂美、保育者をめざす学生の幼保小連携に関する意識－「小1プロブレム」の背景要因についての自由記述から－、お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 Vol.1 pp.43-52(2004)

- 3) 板倉弘幸 , TOSS 浅草 著, 親がする小学校入学までの準備ポイントーベテラン教師のアドバイスより, 明治図書出版(2009)
- 4) 岸井勇雄, 幼児期の家庭教育父母と保育者に送る 45 章, pp138-148, ひかりのくに, (1992)
- 5) 幼稚園教育要領, 文部科学省, (2008)
- 6) 保育所保育指針, 厚生労働省, (2008)
- 7) 文部科学省, 幼稚園教育要領解説, pp77, フレーベル館
- 8) 文部科学省, 幼稚園教育要領解説, pp93, フレーベル館